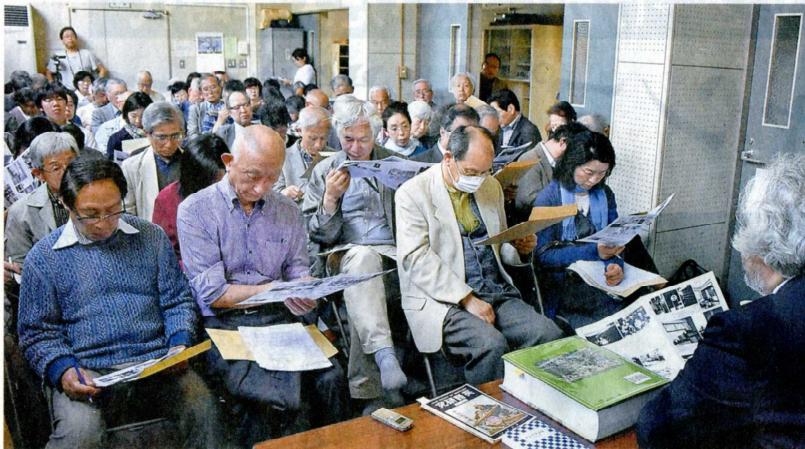


NPO法人「向日庵」の設立に向けた集会で、中島教授の講演に聞き入る
参加者たち(向日市上植野町・西向日コミュニティセンター)



英文学者で民芸運動を草創期から支えた故寿岳文
章氏(1900~92年)が向日市上植野町に構えた
邸宅「向日庵」の保存に向け、NPO法人の設立準
備が進む。同市内で4月30日にあつた「NPO法人
向日庵 設立の会」で、寿岳氏の業績に詳しく同法
人理事長となる中島俊郎・甲南大文学部教授が講
演。向日庵が発信してきたメッセージの重なりや文
化的価値を語った。内容を詳録する。(本田貴信)

保存向けNPO設立へ甲南大・中島教授 文化的価値語る

寿岳一家は、個々が優に研究対象になるような存在だ。

寿岳氏は日本の書誌学の先駆者。英文学研究、和紙研究に携わり、ダンテの「神曲」を翻訳して「」になった。妻の故しげ氏は自伝的小説「朝やエコロジー」を主軸とする翻訳物を出版。長女の故章子氏は一家を代表するスポーツマンで、歴史や女性学、京都の暮らしなどの観点から多くの著作を残した。天文学者で長男の故潤氏は数多くの論文が国際的な論文集に載っている。

個々の方向性は違うが、その全体像である向日庵は、非戦の誓いや人類愛、自然との共存や相互扶助の尊さを訴えかけてくる。

向日庵は戦後、駐日大使などが訪れる国際交流

の場となつた。大使は寿岳氏と分かち合つた仏教の知識に立ち、東西文化の橋渡し役を果たした。

寿岳氏は、外國語の翻訳を通じて文化を橋渡しした。名著の翻訳に索引が付かない悪弊を嘆き、索引が目次と並んで作品の表玄関

に相当すると痛感していった。こうした造本の思想は、インターネット検索で単語を手がかりに内容を把握することが求められる現代においても、今日的な重要性を持つ。

しげ氏は、向日市の竹林の美しさ、しなやかさを何度も書いた。自然との交わりが生きる力となって人間

を持つ。

一家は、言葉を大切にする人たち。だからこそ、言葉が戦争に向かつた時の大きな危険性に敏感だった。章子氏は著作で、兵士が残した辞世や戦争文学について、いかに第2次世界大戦というものが甘くこまかに感化力を及ぼす。このよ

うな自然観を紹介した翻訳を、いふかしく感度を寿岳氏はいぶかしく感じていた。

なかじま・としろう 1949年生まれ。甲南大人文学科研究科博士後期課程修了。93年から現職。大学院生時代、担当教授の縁により向日庵で、故寿岳文氏から英文学などの指導を受ける。編著書「岡本わが町」(神戸新聞総合出版センター)で寿岳氏について記している。

「自分の内にささやく静かな小さな声」 「向日庵」の営み未来へ



中島俊郎・甲南大文学部教授

向日庵 1933年、阪急西向日駅近くの住宅街に建築された木造2階建、約130m²の実験住宅「聴竹居」の設計で知られる京都帝國大教授故藤井厚一氏に師事した故澤島英太郎氏が設計を手かけた。民芸の意匠を取り入れた近代和風建築として高い評価を受ける。

深層おとくに